

東アジアの平和を求めて — ポスト・コロニアルの日中関係を中心に (第8回)

2010年代以降の中国をどうみるか (続)

浅野慎一 (摂南大学特任教授)

※ 兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』2023年7月号に掲載した記事を、一部加筆しました。

前々回(第6回)は、2010年以降、中国が戦略的かつ包括的な政策展開により、世界政治・経済における地位を飛躍的に上昇させてきた経過を素描した。

これを、いかに評価するか。

私には、この中国の変化が、社会主義市場経済(「改革開放」との決別の道を歩みつつあるように思われる。本連載(第5回)で述べた如く、「改革開放(社会主義市場経済)」には当初、二つの狙いがあった。一つは「世界の工場」としての一国的成功、もう一つは市場経済に基づくグローバルな社会主義建設だ。二つの狙いは、前者から後者へという段階論ではない。むしろまったく異質な目標だ。すなわち前者は世界資本主義システムを前提とした中国一国の地位上昇だが、後者は世界資本主義システムそれ自体の克服だ。前者は「開発独裁」の任務だが、後者は共産党にしか達成できない。

しかし、少なくとも現時点で — しかも主に日本のマスメディア報道の偏向した情報に基づいて — 見る限り、中国は2010年頃までに「世界の工場」としての一国的成功という目標を達成し、これをふまえてそれ以降、グローバル市場への投資国、世界の覇権国家の一つへと段階的に変貌してきたように見える。すなわち中国は世界資本主義システムの「周辺」としての成功をふまえ、「中核」化を目指しているようだ。2010年以降の中国が、越境的な等価交換としての市場経済・反独占、地球規模の階級格差の克服、「近代批判としての現代化」を推進してきたとは言い難い。むしろ中国も日本と同様、自国の排他的国益、および「近代化・経済成長による貧困解消」といった資本主義的政策を邁進してきたように見える。

このことは、いうまでもなく中国の共産党独裁と無関係ではない。

ただし、誤解なきよう。私は、中国が「西側諸国を見習って政治を民主化すべき」だの、「共産党独裁を廃止して議会制民主主義を導入すべき」だのと主張しているわけではない。そもそも自由と民主主義、議会制民主主義は、世界資本主義システムの「中核」諸国に成立する特殊な価値・政治体制の一形態にすぎない。それは、決して「先進的」でも「普遍的」でもない。つまり「先進国」は「後進国」の未来像ではなく、「中核」諸国の市民社会や民主主義は「周辺」からのグローバルな搾取の上に成り立つ特殊な体制にほかならないのである。そのことは、「周辺」のまま「民主化」した旧ソ連・中東諸国の混迷と苦難、また何より民主主義を標榜する「中核」諸国が自国の排他的国益と資本主義的發展に奔走している実態からも明らかだ。一国単位の単純な「民主化」は、決して問題を解決しないのである。

さて、中国が一国単位での「世界の工場」化を目指していた2010年頃以前、既存の中核諸国(西側諸国)は中国の共産党独裁を一種の「後進性」とみなして優越感をもって是認していた。それは、共産党独裁が時には自由な資本蓄積の部分的障害でありつつ、しかしそれ以上に有能な「開発独裁」だったからだ。しかし2010年頃以降、中国が「世界の工場」から世界政治・経済の中核へとのし上がると、西側諸国にとってそれは脅威でしかなくなった。もとよりそれは、社会主義革命・反資本主義の台頭としての脅

威ではない。世界資本主義システムの枠内での、独占的な資本蓄積・政治的覇権といった既得権益をめぐる脅威だ。西側諸国は、中国側からみれば明らかに不公正な政治・軍事・経済的な「中国包囲網」作りに奔走し始めた。

ではなぜ中国は、反資本主義・社会主義革命としての脅威になれないのか。それは、中国共産党があくまで中国「国民」の利益、国民国家としての中国の国益を代表する執権でしかないからだ。中国共産党が真に中国「国民」の利益を代表しているか否かは、日本をはじめとする他の諸国の政府がその国の国民の利益を真に代表しているか否かと同様、副次的論点にすぎない。より重要な論点は、中国共産党が——他のほとんどの国の共産党・国民政党と同様——、世界資本主義の被抑圧階級全体の利益を代表しているとは、いかなる意味でも言い難いことにある。個々の国益や国民の利益より、世界の被抑圧階級の利益を代表するにふさわしいグローバルな政治勢力を結集しない限り、社会主義市場経済の継続・発展は困難であろう。「万国の労働者、団結せよ。万国の被抑圧階級、連帯せよ」である。

念のために付け加えれば、これは中国共産党が国内での市場統制、格差解消といった文化大革命への「逆コース」を歩めばよいということでもない。もちろん国内格差の緩和は重要だが、より重要なことは、社会主義市場経済路線に立ち返り、世界資本主義システムそれ自体を変革・克服するグローバル戦略を提示し得るか否かだ。これは中国共産党だけでなく、世界の社会主義・共産主義勢力に課された現代的課題でもある。

今回は、中国の未来について考えてみよう。